

鷺

世阿弥作

ワキツレ 大臣

ツレ（王） 帝

ワキ 蔵人

シテ 鷺

地は 京都

季は 夏

大臣一声「久かたの。月の都の明らけき。光りも君の恵みかな。」

サシ「夫れ明君の御代のしるし。万機の政すなほにして。四季をりくゝの御遊までも。捨て給はざる叡慮とかや。」

王「夫れ青陽の春になれば。」

大臣「ところぐゝの花見の御幸。」

王「秋は時雨の紅葉狩。」

大臣「日数もつもる雪見の行幸。」

王「寒暑時を違へざれば。」

大臣「御遊のをりも。」

王「時を得て。」

地「今は夏ぞと夕涼み。く。松の此方の道芝を。誰踏み馴らし通ふらん。是は妙なる御幸とて。小車の。すぐなる道を廻らすも。同じ雲井の大内や。神泉苑に着きにけり。く。」

王「おもしろや孤島そばだつて波悠々たるよそほひ。

誠に湖水の波の上。三千世界は眼の前に尽きぬ。  
十二因縁は心の裏に空し。げに面白きけしきかな。

地「鷺のるる。池の汀に松旧りて。く。都にも似ぬ

住居はおのづから。実にめづらかに面白や。或は  
詩歌の舟を浮べ。又は糸竹の。聲綾をなす曲水の。  
手まづ遮る。盃も浮ぶなり。あら面白の池水やな。

く。

王詞「いかに誰かある。

大臣詞「御前に候。

王「あの洲崎の鷺をりから面白う候。誰にても取りて  
参れと申し候へ。

大臣「畏つて候。いかに蔵人。あの洲崎の鷺をりから面  
白うおぼしめされ候ふ間。取りて参らせよとの宣  
旨にて候。

ワキ詞「宣旨畏つて承り候ふさりながら。かれは鳥類飛行

の翅。いかゞはせんと休らへば。

大臣「よしやいづくも普天の下。率土の内は王地ぞと。

ワキ「思ふ心を使りにて。

大臣「次第々々に。

ワキ「蘆間の陰に。

地「ねらひよりねらひよりて。岩間の陰より取らんとすれば。此鷺驚き羽風を立てゝ。ばつとあがれば力なく。手を空しうして。仰ふぎつゝ走り行きて。

汝よ聞け勅詔ぞや。勅詔ぞと呼ばゝりかくれば。此鷺立ちかへつて。本の方に飛び下り。羽を垂れ地に伏せば。抱きとり龍顔に掛け。実にかたじけなき王威のめぐみ。有難や頼もしやとて。皆人感じけり。実にや仏法王法の。かしこき時のためしとて。飛ぶ鳥までも地に落ちて。叡慮にかなふ有難や。く。猶々君の御恵み。あふぐ心もいやましに。御酒を勧めて諸人の。舞樂を奏し面々に。

鷺の蔵人。召し出だされてさまぐの。御感のあまり官を給び。共になさるゝ五位の鷺。さも嬉しげに立ち舞ふや。

シテ「洲崎の鷺の羽を立てゝ。

地「松もそなるゝけしきかな。  
(破の舞又は乱)

シテ「かしこき恵みは君朝の。

地「かしこき恵みは君朝の。四海に翔る翅まで。なびかぬ方もなかりければ。まして鳥類畜類も。王

威の恩徳のがれぬ身ぞとて。勅に従ふ此鷺は。神妙々々放せや放せと。かさねて宣旨を下されければ。げに忝き宣命を含めて。放せば此鷺。心うれしく飛びあがり。心うれしく飛びあがりて。ゆくへも知らずぞなりにける。